

2024/7/28

## ルカの福音書 講解メッセージ⑬

### 『ルカの福音書 6章 37-49節 人生の逆風は順風になる』

人生の逆風に遭った時、それを順風に変える方法を、聖書は教えてくれます。それは、心の向きを変えること、つまり、人生の目標を変えることです。

私たちが人生の目標とするものは、究極的には二つしかありません。一つは、時間性における目標、つまり、この世界での目標です。ただし、この目標の問題は、行きつく先は死であって、最後はすべて滅んでしまうということです。これに対して、もう一つ、神が人に与えた目標があります。この目標の行きつくところは永遠のいのちです。不動であり、失うことのない目標です。

この目標のことを神の戒めと言います。神の戒めは「愛しなさい」ということに集約されます。神を愛し、人を愛しなさい。これこそ、私たちが目指すべき目標なのです。人から悪く言われたとき、どうすれば人から良く思われるかを目指すのではなく、その人たちを愛そうとするなら、逆風は順風に変わります。人から悪く言われても、希望に変わります。ですから、聖書は私たちに愛を目指して生きるように教えているのです。

「さばいてはいけません。そうすれば、自分もさばかれません。人を罪に定めてはいけません。そうすれば、自分も罪に定められません。赦しなさい。そうすれば、自分も赦されます。」(ルカ 6:37)

なぜさばいてはいけないのか、なぜ赦さなくてはいけないのか、その理由をこの世界は教えてはくれません。しかし、聖書は教えてくれます。それは、誰もがキリストのいのちをもっており、キリストの体につながっていて、神の一部分だからです。

自分の体の調子が悪くなったら、いたわるものです。批判してさばくことはしません。調子の悪い器官を痛めつけたら、苦しむのは自分です。誰もが神によって造られ、神のいのちの息を吹き込まれているので、いのちを共有しています。だから、さばいてはいけないのです。

心を永遠である神に向け、人生の目標を、永遠に滅びない愛に向けていくことが大切です。その具体的な行いが、さばかないで赦すということなのです。

「与えなさい。そうすれば、自分も与えられます。人々は量りをよくして、押しつけ、揺すり入れ、あふれるまでにして、ふところに入れてくれるでしょう。あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返してもらうからです。」

(ルカ 6:38)

なぜ私たちは人をさばいてしまうのでしょうか。それは、私たちに「ねばならない」という律法があるからです。何を「ねばならない」と考えるかについては、人によって少しずつ違いがありますが、とにかく、私たちが人をさばくのは、相手が自分の中にある「ねばならない」という律法に違反したからです。

この律法は、子どもが親の期待に応えようとするところから始まっています。人は皆、愛されたいという欲求を持っているために、親の期待に応えようとします。それが律法になり、同じ律法で人を見るようになります。自分は律法に応えようと頑張っているのに、それに違反する人を見ると腹が立つのです。

私たちが「愛されたい」という欲求を持っているのは、愛に支えられているからだ。ソクラテスやプラトンといった哲学者たちは考えました。哲学では、この愛のことを「神」と呼びます。人間は、神という土台の上に建てられ、神に支えられているから、愛される喜びを知っているから、愛されたいという欲求を持つのだと、哲学では結論づけました。

聖書は、このことをさらに深く掘り下げて説明しています。私たちが神のいのちを土台とし、神に愛されていて、愛されたいという願望を持つのは、死が入り込んだからだ。と説明しています。アダムとエバが悪魔にだまされて罪を犯し、死が入り込みました。死とは、分離を意味します。死が入り込んだことで、私たちのからだは有限性になり、その結果、永遠性の神が認識できなくなりました。つまり私たちは神に愛されていて、愛される喜びは知っているのですが、自分が神に愛されていることが認識できなくなってしまったのです。認識できるのは、この死のからだが減びること、自分が裸であること、そしていつかは土に帰ることです。これを聖書は死の恐怖の奴隷という言い方をします。こうして、愛される喜びを知っているにもかかわらず、神に愛されていることが認識できなくなったため、人は、この世界で愛されることを求めるようになったのです。

これは、人は自分では気づかないだけで、誰もが神を求めて生きていることを意味します。愛されよう、認められようとするのは、神を求めているからです。神に愛されている自分が見えないから、何かに置き換えて、何かを神として生きようとするのです。

そういうわけで私たちは人から愛されようとして律法を持ち、そして、律法に違反

する人を見るとさばくようになりました。

ですから、大切なことは、神に愛されている自分に気づくしかないのです。それが、あなたの人生のすべての問題を解決します。あなたの逆風が順風になるためには、神に愛されていることに気づくしかありません。そのことを気づかせるために、イエス・キリストが来られました。

## ■盲人のたとえ

「イエスはまた一つのたとえを話された。「いったい、盲人に盲人の手引きができるでしょうか。ふたりとも穴に落ち込まないでしょうか。」(ルカ 6:39)

続いてイエス様は、民衆に向かって語り掛けました。

盲人とは誰でしょうか。実は、イエス様は、すべての人を盲人と言っておられます。それは、私たちが有限性の体になったために神が見えなくなり、神を土台としていることも、神に無条件で愛されている自分も見えなくなってしまったからです。見えていない者がどうして人を導くことができるでしょうか。私たちは何もできないのです。私たちが考えることすべてが間違っています。なぜなら前提が違うからです。神に愛されている自分が見えないために、自分をだめな者とする間違っただけで人生を組み立てているのです。つまり、どうすれば自分は良くなるか、どうすれば認めてもらえるかを目指して頑張っているということです。それは、自分が神に無条件で愛されていることが見えていないからです。だから、イエス様は私たちを盲人と呼ばれたのです。

「弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。あなたは、兄弟の目にあるちりが見えながら、どうして自分の目にある梁には気がつかないのですか。自分の目にある梁が見えずに、どうして兄弟に、『兄弟。あなたの目のちりを取らせてください』と言えますか。偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうしてこそ、兄弟の目のちりが見え、取りのけることができるのです。」

(ルカ 6:40-42)

盲人のままでは、人を導くことはできません。しかし、あなたがたも訓練を受ければ、人を導くことができるようになりますとイエス様は言われました。その訓練とは、自

分の罪に気づいて、罪を取りのぞくという訓練です。それは、次のようなことを指します。

「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」（ヘブル 4:12）

まずは、神のことばで自分の目の中にある梁に気づくことです。聖書の言葉は、私たちの心の中にある罪を明らかにしてくれます。私たちの心の奥底に何が眠っているのか、外側を見ただけではわかりません。しかし、神のことばはあなたの心の奥底に眠っていた悪い考えを明らかにします。

たとえば、神のことばは「自分の敵を愛せよ」と要求します。愛とは表面的に親切にすることではありません。聖書は見返りを求めてやっているのは愛ではないと言います。愛は見返りを求めず、命さえ差し出すものです。イエス様は、自分を憎む敵のために命を差し出しました。これが愛だということです。

この愛を実行せよと言われると、私たちは自分の心の奥底にある「そんなことはできない」という自分の限界に気づくのです。つまり、自分の弱さ、罪に気づくのです。それを認めない限り、神との交わりは一切できません。

神様は私たちの弱さにしか働きません。私たちが神と出会うことができる場所は、自分自身の弱さであり、罪です。自分には罪がない、自分は正しいというのであれば、あなたと神様には何のかかわりもありません。神様は、私たちの弱さを担い、重荷を背負い、罪を背負うために来られたのですから、罪を隠す必要はないのです。

医者が必要なのは、病気だからです。同様に、神が必要なのは、罪人だからです。神のことばは自分が罪人であることに気づかせてくれるものです。「汝の敵を愛せよ」「さばいてはいけない」「与えなさい」…私たちには、何一つできません。しかし、大切なことは、この言葉を通して、自分の限界に気づくことです。

「造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。」（ヘブル 4:13-15）

神のことばは、あなたの罪を明らかにし、自分の弱さの限界に気づくようにしてくれます。神のことばを食べ、それに従おうとするなら、すぐに自分の弱さに出会います。しかし、心配はいりません。罪をとりなしてくださる大祭司イエス・キリストがおられるからです。

イエス・キリストは、私たちをとりなすために来られました。私たちがどのような者であるのか、自らが弱さを体験して知ってくださっているというのです。そのため、私たちに同情して助けてくださるから、心配はいらないと言っています。

どうすれば十分訓練を受けて自分の目から梁を取りのけることができるか、その答えは、神のことばに従って生きることであり、その結果、自分の心の中に隠れていた罪が明らかになった時、イエス・キリストを思い出して、その重荷を持ってただ神のもとに行くことです。そうすれば、神がその重荷を下ろさせてくださり、あなたの病をいやしてくださいます。

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。」

(ヘブル 4:16)

すべての罪は、死が入り込んだために神の愛が見えなくなったことから始まりました。つまり、私たちの罪は死のとげ、すなわち、死による病気です。(I コリント 15:56) ですから、神は私たちの罪を裁くためではなく、いやすために来られたのです。聖書には「救うために来られた」と訳されていますが、「救う」という言葉には「いやす」という意味もあります。

イエス様はご自身を医者にととえておられます。私たちは、イエス様のもとに罪を持っていくだけで、自分の梁を取りのぞくことができるようになるのです。

そもそも聖書が教えている罪は、この世で考えられている罪とは異なります。この世では、罪とは道德規範に違反すること、律法に違反することですが、聖書が教える罪とは、神の思いに逆らうことです。

では、神の思いとは何でしょうか。それは愛です。愛とは、一つになる運動です。そして、それはイエス・キリストを信じるのが、一つになることの第一ステップです。ですから、信じないことが罪なのです。

「それは、父よ、あなたがわたしにおられ、わたしがあなたにるように、彼らがみな一つとなるためです。また、彼らもわたしたちにおるようになるためです。」(ヨハネ 17:21)

「わたしは彼らにおり、あなたはわたしにおられます。それは、彼らが全うされて一つとなるためです。それは、あなたがわたしを遣わされたことと、あなたがわたしを愛されたように彼らをも愛されたこととを、この世が知るためです。」(ヨハネ 17:23)

一つとなることが、神の思いであり、愛です。一つになるには、無条件で受け入れなければなりません。条件をつけていては、一つになることはできません。それは、「信じる」ということです。

「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」(ヨハネ 16:8)

その方とは、聖霊です。私たちは、自分たちの認識が誤っていたことを、まず認めなければなりません。

「罪についてとは、彼らがわたしを信じないこと、義についてとは、わたしが父のもとに行き、あなたがたがもはやわたしを見なくなること、また、裁きについてとは、この世の支配者が断罪されることである。」(ヨハネ 16:9-11)

これまで、信じないことが罪だという認識はあったでしょうか。

通常、私たちは、人から批判されたら落ち込むものです。しかし、神はあなたのことを何とっておられるのでしょうか。神があなたを批判しているのでしょうか。そのような御言葉はありません。むしろ、あなたに対して何度も「恐れるな」と語っておられます。それは、あなたがよい者だからです。神が私たちを造った時に言われた最初の言葉は、「非常に良い」です。神のことばは変わりません。神はあなたのことを「高価で尊い」と語っておられます。あなたのことを神の子と呼び、十字架で愛を示されました。

あなたは良き者であり、必要な者であり、私の一部だと神は言われます。ところが、あなたは、その神のことばを信じないのです。あなたが落ち込むとき、苦しむとき、あなたは神のことばを信じないで、人の言葉を信じています。

たとえば、私たちは病気を恐れ、落ち込みますが、聖書が教えていることは、「あなたは死なない」ということです。その言葉を信じることができれば、私たちは死が近づいてきても希望が持てます。つまり、死を恐れるのは罪です。

人生の中でつらいと感じていることは、すべて神のことばを信じていない不信仰から生まれた感情です。ですから、神のことばを信じるなら、人生の逆風はすべてあなたを応援するものとなるのです。

神のことばを信じるがゆえに、この世界では敵とみなされてしまう。なぜならこの世界は滅びゆく世界なので、神のことばを敵とするからです。神のことばは真理であり、この世界の言葉は真理に逆らうのです。

だから、迫害される時は喜びなさい、貧しい者は喜びなさいと聖書は教えます。反対にこの地上で順風満帆な人や豊かな人は哀れだと言います。

あなたの心は人に向いていて、神に向いていない。もし私たちが神のことばにしっかり耳を傾けるなら、迫害されることは感謝になります。なぜなら神の変わらない言葉によって生きているからです。そのことを知り、動揺しなくなるから、感謝なことなのです。苦しみに遭ったことで私たちは神のおきてを学ぶと聖書に書いてあります。神のことばに踏みとどまろうとすることが、罪と戦うということなのです。

人から良く思われるために道徳的な人間になろうとすることが罪と戦うことではありません。聖書が教える罪とは、神のことばを信じないことです。人の言葉を信じると、落ち込みます。感情が上下し、つらさを感じます。しかし、神のことばは変わりません。神のことばを土台とするなら、私たちは安定した人生を送ることができるようになるのです。

「悪い実を結ぶ良い木はないし、良い実を結ぶ悪い木もありません。木はどれでも、その実によってわかるものです。いばらからいちじくは取れず、野ばらからぶどうを集めることはできません。」(ルカ 6:43-44)

悪い実とは神を信じないこと、良い実とは神を信じることです。神のことばを信じないために人と比べて嫉妬したり妬んだりして悪い行いに至るのであり、神のことばを信じるなら、自分が愛されていることがわかるので、人を愛することができ、良い実がなるのです。神のことばを信じるか信じないかが、重要なのです。

「良い人は、その心の良い倉から良い物を出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を出します。なぜなら人の口は、心に満ちているものを話すからです。」

(ルカ 6:45)

私たちの中には、神のことばを信じる思いと人の言葉を信じる思いの両方が、同時に存在しています。聖書はこれを御霊の思いと肉の思いと言っています。

神のいのちという良い倉から御言葉を取り出して生きるのか、それとも、この世という倉から人の言葉を取り出して生きるのかを問われています。この世とは、神のことばと反するものです。あなたは、この世の言葉と神のことばのどちらを取って生きていくのでしょうか。人は、神のことばで生きるのであって、人の言葉で生きるのではありません。

「なぜ、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人たちがどんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、それから家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せたときも、しっかり建てられていたから、びくともしませんでした。聞いても実行しない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家は一ぺんに倒れてしまい、そのこわれ方はひどいものとなりました。」（ルカ 6:46-49）

イエス・キリストを信じるなら、イエス様の語ったことばを実行するように言っておられます。ただイエスは主であると信じるだけでは、基礎を築くことができません。御言葉を信じる戦いが土台を築くのです。その上に自分を建て上げていくなら、何が来てもびくともしない人生を送ることができます。しかし、ただイエス様を信じているというだけでは土台が弱いので、何かあるとすぐに倒れてしまいます。人の言葉を優先し、困難を優先し、自分は愛されていないとつぶやくのは、神のことばを信じないからです。つらさを感じた時は、人の言葉を優先させてしまったことに気づいて、向きを変えましょう。神のことばを信じようと向きを変えるなら、逆風は順風になります。苦しみに遭ったことは幸いとなり、患難が喜びとなって希望に変わるのです。それには、神のことばをしっかり食べて土台を築くことが必要です。キリストが語られた一つ一つの言葉を信じ、自分の土台を築きましょう。